民家等を利用した学童保育所にみる「拠点性」の利点と成立条件

- 大阪市の事例調査より -

ADVANTAGES AND INDISPENSABLE CONDITIONS FOR THE BASE OF
CHILDREN'S DAILY LIFE AFTER SCHOOL THROUGH THE SCHOOL-AGE
CHILDCARE CENTERS WHICH USE PRIVATE HOUSES

- A case study of Osaka city -

塚田 由佳里*, 小伊藤 亜希子**

Yukari TSUKADA and Akiko KOITO

The purpose of this study is to clarify advantages and indispensable conditions for school-age childcare centers which use private houses as the base of children's daily life after school. Hearing and observation surveys were carried out. The main results are as follows:

1) Indispensable conditions: ① Children can use neighboring areas for school-age activities. ② Children can play how and what they want, to some degree. ③ Children are allowed to come and go from the facility. 2) Requirements for the base of children's daily life after school: ① Existence of play areas and surrounding resources. ② Areas and resources to play near the school-age childcare center. ③ The appropriate amount of staffing to properly oversee the children under their care. 3) Advantages: ① Getting life experience by utilizing surrounding resources. ② Interaction with other children and adults. ③ Vitalizing community by children's utilizing local areas.

Keywords : school-age childcare center, the base of children's daily life after school, child, play, community

学童保育所, 拠点性, 子ども, 遊び, 地域

1. 研究の背景と目的及び既往研究の検討

戦後、働く親の自主保育から生まれ、草の根的に広がった学童保育所^{注1)}は、1997年に児童福祉法に位置づけられて以降、国の少子化対策、仕事と子育ての両立支援策、次世代育成支援対策として推進され、整備が進められてきた。待機児童の解消や学童保育の適正規模化を緊急課題としつつ、今後はガイドライン^{注2)}をふまえて量的拡大・質的拡充を図ることが期待される。

一方、近年、子どもが巻き込まれる犯罪報道が増加し、体感不安が高まるなかで、「全児童対策事業」や「放課後子どもプラン」に代表されるように、主に小学校施設を活用して安全・安心な活動場所を提供する「放課後の居場所づくり」の取り組みが起こってきている。これらの居場所や学童保育所では一般的に、防犯対策として自由な出入りが禁止されており、斎尾ら¹⁾は、これらの居場所の安全性を評価しつつも、子どもの活動範囲を制限するといった課題を指摘している。このことは、地域との関わりが希薄化する、多様な体験の機会が喪失する等、子どもの豊かな放課後の生活を阻害することにつながると考えられる。そのため、過度に安全管理が重視された居場所に子ども達を囲い込むのではなく、学童保育所を「家庭に代わる放課後の生活拠点」として捉え直し、地域の大人が見守るなかで子どもたちが自発的に遊びを展開できるように地域環境を整備していくことが必要と考える。

建築計画分野における学童保育所に関する研究はいくつかあり、

民家型学童保育所を対象に室機能分解と児童1人当たりの床面積との関係を明らかにした三矢らの研究²⁾、保育室の分離段階と児童の行動特性を捉えた谷村らの研究³⁾、活動機能と保育室の平面構成の相互関係を捉えた宮本らの研究⁴⁾によって学童保育所に求められる空間条件が一定明らかになっている。また、全児童対策事業と一体化した学童保育のあり方を検討した松本らの研究⁵⁾もある。しかし、地域との関わりという観点から検討した研究はほとんどない。そうしたなかで、学童保育所が持つ「プレイベース」・「コミュニティベース」としての可能性を評価した横山らの研究^{6)~9)}は重要である。

以上の背景に基づき、本研究では、「子ども達が地域のものや人との関わりのなかで放課後を過ごす拠点」となっていることを「拠点性」と捉え、その理念に沿いやすいと考えられる、民家等を利用した学童保育所を対象に、地域との関係を分析することで、この理念を実現させるために必要な条件と「拠点性」の利点を明らかにすることを目的とする。なお、民家等を利用した学童保育所が「拠点性」という理念に沿いやすいと判断した背景には、補助金が少なく、公設の学童保育所に比べて施設環境を充実させるににくいことがある。そのため、施設空間が狭い、戸外の遊び場を有していないといった施設環境の乏しさを補うために地域の公園を利用し、公園等の地域空間を利用するなかで地域の人との関わりが生まれる可能性があるかと判断されるからである。

* 大阪市立大学大学院生活科学研究科 大学院生・修士(学術)

** 大阪市立大学大学院生活科学研究科 准教授・博士(工学)

Graduate Student, Graduate School of Human-Life Science, Osaka City Univ.

Assoc. Prof., Graduate School of Human-Life Science, Osaka City Univ., Dr. Eng.

2. 調査概要

2-1. 事例の選定

調査対象は、民家等を利用した学童保育所に着目し、こうした事例が数多く存在する大阪市を対象地域とした。地域における遊びに影響を与えると考えられる以下の3項目を基準に置き、それらの要素がそれぞれ異なる8事例を選出した。選定基準は、①登録児童数の規模(表1)、②公園・広場等の遊び場の有無と学童保育所からの距離(表2)、③学童保育所近辺にある、車道や路地といった道の種

類(図1)である。

2-2. 大阪市の学童保育の概況

大阪市の放課後施策には、①「留守家庭対策事業」(1969年開始/125ヵ所)、②「子どもの家事業」(1989年開始/32ヵ所)、③「児童いきいき放課後事業」(1992年開始/299ヵ所)がある。①は主に父母会が民家等を利用して自主運営しているもの、②は社会福祉法人等が実施しているもの、③は大阪市教育振興公社が全公立小学校内で実施しているものであり、本研究で着目する学童保育所は①に

表1 事例概要

事例	A	B※1	C	D	E	F	G	H
所在地	東住吉区	旭区	西淀川区	住吉区	住之江区	鶴見区	西区	淀川区
周辺環境	神社・寺が点在し、長屋と路地が多く残る密集低層住宅地。近くに商店街がある。	河川と幹線道路に挟まれた古い住宅地。長屋地区と団地地区がある。	路地が多く、すぐそばに大きな商店街がある比較的low層な住宅地。周辺には河川敷がある。	高層の団地がある他は、比較的low層な住宅地。河川敷がすぐそばにある。	大きな商店街があり町工場がある住工混在地区。幹線道路沿いには高層集合住宅が多い。	町工場が混在する住宅地。高層マンションや大型店舗の建設が進み、児童数は増加傾向にある。	比較的都心部に位置し、住工混在地区と開発地区がある。幹線道路と大きい商店街がある。	交通の便がよく、商業施設や高層集合住宅が多い開発地区。大規模な団地・河川敷がそばにある。
創設時期	1984年	①1978年 ②1975年	1977年	1978年	1980年	1986年	1980年代	1962年
開設時期	2000年頃	①不明 ②不明	1977年	1994年	1980年	2005年	2004年	1962年(建替有)
施設形態	長屋	①長屋 ②長屋	戸建	雑居ビル1階	マンション1階	戸建	戸建	集会所
有効面積	34㎡	①54㎡ ②56㎡	46㎡	55㎡	49㎡	93㎡	51㎡	100㎡
所有形態	賃貸	①賃貸 ②賃貸	貸与	賃貸	賃貸	賃貸	賃貸	賃貸
賃料 利用料	約3万円/月	①7万円/月 ②6.5万円/月	無料	8.9万円/月	7万円/月	7.5万円/月	5万円/月	洋室:300円/時 和室:200円/時
開設場所の 選定理由	OBの紹介により格安の賃料で借りる事ができたから。	公園がある町内の範囲で探した。	固定資産税のみの負担で、家賃がないから。	家主に多数の子どもの利用を許可してもらえたから。	敷金・家賃が高いが、当時は前面に広い空地があり、子ども達がのびのびと遊べる環境だったから。	校区内で、以前から利用していた公園に近く、予算内で、より広いから(2軒長屋を戸建に改修)。	家賃が安く、子ども達が生活できる一定の広さがあり、小学校や公園に近いから。	団地に住む父母が団地内の集会所を利用して創設した。
保育時間	～18:00 (19:00)	～18:00 (19:00)	～18:00 (19:30)	～18:00 (19:00)	～18:00 (19:00)	～17:30 (19:00)	～18:15 (19:15)	～18:00 (19:00)
受入校区	1校区	1校区	2校区	2校区	3校区	6校区	4校区	2校区
対象学齢	新1～6年生	新1～6年生	新1～6年生	新1～6年生	新1～6年生	新1～6年生	新1～6年生 障害児は18歳まで	新1～6年生
登録児童数	12名	①23名 ②21名	11名	27名	21名	70名	20名※2	40名
学年構成	8名 2名 2名	①11名 7名 5名 ②9名 5名 7名	6名 3名 2名	10名 5名 12名	10名 7名 4名	37名 25名 8名	10名 4名 6名	20名 15名 5名
指導員数	正:1名 非:2名	①正:2名 ②非:2名	正:1名 非:1名	正:1名 非:2名	正:2名 非:1名	正:1名 非:3名	正:1名 非:2名	正:1名 非:3名
保育体制	2名	①2名 ②2名	2名	3名	2名	4名	2名	4名
保育料	1.5万円/月	1.8万円/月	2万円/月	1.6万円/月	2.1万円/月	1.6万円/月	2万円/月	1.5万円/月

<備考> ※1:それぞれ独立した学童保育所であるが、同一校区の子どもが利用し、合同で保育することが頻繁にあるため、1事例として扱う。 ※2:高校生(障害児)1名を除く。

創設時期:学童保育所として開所した時期。
有効面積:子どもの活動スペースとして大阪府が認定している面積を表記した。
受入校区:市立小学校の数で算出した。
指導員数:正は正規雇用、非は非正規雇用。
保育料:基本の保育料。全ての事例で家庭状況により減免制度がある。

開設時期:現在の施設で開設した時期。
保育時間:平日における保育時刻。(19:00)は延長保育の終了時刻。
学年構成:左から、低学年(1～2年生)、中学年(3～4年生)、高学年(5～6年生)。
保育体制:通常の保育時間における指導員数。

表2 地域空間・地域資源の有無と学童保育所からの距離(徒歩10分以内)

	A	B	C	D	E	F	G	H
地域空間	学(○) 公(○・●)	学(●) 公(○)	学(○・●) 公(○×2・●×2)	学(●×3) 公(○×2・●)	学(○・●) 公(●・○)/広(○)	学(○) 公(○・○・●)	公(○)	学(●) 公(●)/広(○×2)
	○S 寺(○)/神(○)	寺(○)/河(○)	河(●)	河(○)			神(○)	神(●)/河(●)
地域資源	道(○)	道(○)/駐(○)	道(○)	駐(○)	駐(○)	道(○)/駐(○)	駐(○)	道(○)/駐(○)
	商(○・●) ス(○・●) 駄(○) 銭(●)	商(●) ス(●)	商(○) ス(○×2・○) 駄(○) 銭(●)/集(●)	ス(●) 駄(●) 銭(●)/集(○)	商(○・●) ス(○・●) 駄(○×2・●) 銭(○)/集(○・●)	ス(○×2) 駄(○)	商(○) ス(○) 駄(●) 銭(○)	ス(●) 集(○・○)

[遊び専用空間] 学:小学校の校庭 公:公園 広:広場
[OS:オープンスペース] 寺:寺の境内 神:神社の境内 河:河川敷 [庭先空間] 道:細道・路地 駐:駐車場
[地域資源] 商:商店街 駄:駄菓子屋 ス:スーパー等 銭:銭湯 集:集会所等

[学童保育所からの距離] ○:徒歩0～2分 ○:徒歩3～5分 ●:徒歩6～10分
距離については低学年の子どもが歩いた場合の所要時間で捉えた。
数字は各地域空間・地域資源の数(数字がないものは1ヵ所)を示す。

図1 庭先空間と使い方に関するルール

該当する。いずれの事業も対象学齢や開設日・開設時間等、類似する点が多いが、①②が子どもの健全育成をねらいとして共働き・ひとり親家庭の子どもの対象に「生活の場」を提供する学童保育の機能を有するのに対し、③は親の就労に拠らない全ての子どもを対象に「遊びの場」を提供する全児童対策として位置づけられ、それぞれが独立して実施されている。

大阪市の学童保育所は、全国的には少数の民設民営であり、父母自ら運営に関わるため保育内容等に利用者のニーズを反映しやすく、柔軟できめ細やかな保育を実現しやすい一方で、補助金が少ないために保育料で家賃や指導員の人件費等を賄わねばならず、②③では利用料が無料なのに対し、月額2万円程度の高額な保育料が必要である。開設場所は、長屋や戸建て等の民家が大半で、アパート、雑居ビル、保育園内、集会所等、多様である。学童保育の規模は、10～19人が6割(75ヵ所)、20～35人が3.5割(44ヵ所)、36人以上が0.5割(6ヵ所)^{注3)}と、比較的小規模なところが多い。民家等を利用した学童保育所では、生活に必要な設備が備わっており、家庭的な雰囲気を保持しやすい一方で、施設が狭い、戸外の遊び場がない、複数の子どもの使用に施設・設備が対応していない、近隣へ音や振動が伝わりやすいため気を遣ってのびのび遊べない等の空間的課題を抱えている¹⁰⁾。

2-3. 事例概要

1) 利用児童の属性(表1)

学童保育の対象学齢は一般に概ね10歳未満であるが、全ての事例で新1年生から6年生まで受け入れている。学童保育所は子どもが自ら歩いて通所する場であるため小学校区毎の設置が望ましいが、大阪市ではそこまで整備が進んでおらず、受入校区の数は1校区(A・B)、2校区(C・D・H)、3校区以上(E・F・G)がある。登録児童数の規模は、10人程度(A・C)、20人程度(E・G)、30人程度(D)、40人程度(B・H)、70人程度(F)のものがあり、学年構成は、低学年(1～2年生)が過半数を占めるA・C・F、中学年(3～4年生)が3割以上であるE・H、高学年(5～6年生)が2割以上を占めるB・D・Gがある。

2) 運営特性(表1)

運営主体は全ての事例が父母会である。保育料は1.5万～2万円と、一般的な学童保育所と比べて高額である。通常の保育体制は、2名体制(A・C・E・G)、3名体制(D)、4名体制(B・F・H)のものがある。開設場所は、集会所(H)、雑居ビル・マンションのテナント部分(D・E)、それ以外は民家(A・B・C・F・G)であり、所有形態は、貸与(C)と賃貸(A・B・D・E・F・G・H)がある。施設の有効面積は、約50㎡(A・C・D・E・G)と約100㎡(B・F・H)のものがある。D・Hを除き、現在の開設場所を選んだ理由をみると、賃料(A・C・F・G)と公園との位置関係(B・E・F・G)が優先される条件となっている。C・E・H以外は移転経験があり、現施設での開設期間は、3年以内(F・G)と3年以上(A・B・C・D・E・H)のものがある。

3) 周辺環境(表2)

子どもの生活圏は徒歩で移動できる範囲であり、本研究では低学年の子どもが歩いた場合にかかる時間で、徒歩10分以内の範囲と捉える。ここでは、学童保育所の周辺に存在する地域空間・地域資源の有無と学童保育所との位置関係を整理する。なお、距離については、

低学年の子どもが歩いた場合にかかる時間で捉えた。

①遊び専用空間

子どもの遊びを前提として計画された空間であり、小学校・公園・広場を指す。最寄りの小学校までの距離は、徒歩3～5分(A・C・E・F)と徒歩6～10分(B・D・H)、徒歩11分以上(G)である。全ての事例で徒歩10分以内に公園・広場が存在し、1ヵ所のみ(B・G)と2ヵ所以上(A・C・D・E・F・H)のものがある。最寄りの公園・広場までの距離は、徒歩2分以内(B・D・E・F・H)と徒歩3～5分(A・C・G)がある。

②オープンスペース(以下OS)

子どもの遊びを前提に計画されていないが、子どもの遊び場となる要素をもった空間であり、寺・神社、河川敷を指す。A・B・G・Hには寺・神社があり、B・C・D・Hには河川敷があるが、E・FにはOSがない。最寄りのOSまでの距離は、徒歩2分以内(A・D)、徒歩3～5分(B・G)、徒歩6～10分(C・H)である。

③庭先空間

学童保育所近辺にある、本来は他の機能をもつが子どもの遊び場となる要素をもった空間であり、車の通らない細道・路地、駐車場を指す。Dを除く全ての事例には庭先空間があり、道(A・B・C・F・H)と駐車場(B・E・F・G・H)がある(図1)。学童保育所近辺にある道の種類は、歩道(H)、細道・路地(A・B・C・F)、車道(D・E・F・G)であり、Gは一車線道路(一方通行)、D・Fは歩道が有る片側一車線道路、Eは歩道が有る片側三車線道路である。アプローチ空間をみると、車道に面したD・G以外の事例では、学童保育所と庭先空間がつながっている。

④地域資源

学童保育所周辺に存在する、商店街・スーパーマーケット(以下スーパー)・駄菓子屋・ホームセンターといった商店、銭湯、ホール・集会所、図書館といった地域施設等を指す。全事例で徒歩10分以内に商店があり、最寄りの商店までの距離は、徒歩2分以内(A・C・E・G)、徒歩3～5分(F)、徒歩6～10分(B・D・H)である。A・C・E・F・Gには駄菓子屋があり、徒歩3～5分(A・C・E・F)と徒歩6～10分(G)の位置にある。その他、A・C・D・E・Gには徒歩10分以内に銭湯があり、C・D・E・Hには徒歩10分以内にホール・集会所がある。

2-4. 調査方法

8事例を対象に、地域との関係に関するヒアリングを指導員に実施した。主な質問項目は、運営・保育方針、地域空間・地域資源の利用実態、地域住民との関わりであり、地図を用いて聞き取った。調査時期は2007年10月～11月である。さらに、協力が得られた7事例(Hを除く)を対象に観察調査を実施した。特別な行事等がない平日1日において、来所時から帰宅時までの間、子ども及び指導員の滞在場所と行為を10分毎に記録した。併せて、学童保育所からの出入りの様子と遊び場への移動の様子も記録した。調査時期は2007年10月～12月である。

3. 地域空間および地域資源の利用実態

前述したように、大阪市の民家等を利用した学童保育所では、戸外の遊び場を備えておらず、普段の外遊びには地域の公園・広場等を利用している場合が多い。本章では、子ども達がどのような地域

空間・地域資源を利用して遊んでいるのかを明らかにする。活動の種類により地域空間・地域資源の利用の仕方は異なると考えられるため、普段の遊びの場合とイベント等の特別活動の場合に分けて考察を進める。地域空間・地域資源の利用実態を図2に、利用されている地域空間・地域資源と学童保育所との位置関係を表3に示す。

3-1. 普段の遊び場

1) 外遊び

図2をみると、全ての事例で地域にある空間を利用して外遊びを行っていることがわかる。利用されている場所は、公園・広場といった遊び専用空間だけでなく、寺・神社、河川敷といったOSや学童保育所前の道・駐車場といった庭先空間もある。しかし、小学校は、「いきいき放課後事業」の活動が優先されるため、普段の遊び場としては利用されていない。

Aでは、ほぼ毎日、徒歩5分の公園①を利用して遊んでいる。土曜日等の一日保育では公園③（徒歩30分）へ出かけることがあるが、徒歩10分の位置にある公園②は、移動に時間がかかるため、普段の遊び場としては利用されていない。学童保育所前の道では、ボール遊びや鬼ごっこ等の集団遊び、けん玉等の遊びがみられ、大声を出して遊んでいても近隣からの苦情はない。Bでは、すぐそばにある公園（徒歩2分）をほぼ毎日利用し、地域の子ども達と混ざってボールや遊具を使って遊んでいる。学童保育所前の道では、近隣へ迷惑をかけないように、ボール遊びや鬼ごっこといった動的遊びは制限（図1）され、一輪車や縄跳び、楽器演奏をして遊んでいる。学童保育所から徒歩4分の位置に河川敷があるが、保育するには広過ぎることと、子どもだけで行ってはいけないという小学校での決まりを考慮して学童保育でも利用していない。Cでは、通常、公園①（徒歩5分）を利用し、雨天の場合は高架下にある公園④（徒歩8分）を利用している。公園①と同等の距離にある公園③（徒歩5分）は、ゴミが多いことやボール遊びができる広さがないことから利用されておらず、それより遠い公園②（徒歩7分）も利用されていない。学童保育所前の道では、近隣からの苦情によりボール遊びを禁止しているが、追いかっこ等の遊びがみられる。土筆採りや魚・ザリガニ釣りができる河川敷（徒歩10分）は利用され、特に春先には頻繁に出かけている。Dでは、ほぼ全ての動的遊びが公園①（徒歩1分）で行われ、学童保育所からすぐ近くにある河川敷（徒歩2分）も散歩等に利用されている。公園②（徒歩2分）は、公園①を十分に利用できているため、あまり利用されていない。Eでは、地域の子ども達と話し合った結果、週3回は公園③（徒歩15分）を優先的に使うことができ、それ以外の日は学童保育所に近い広場（徒歩2分）が利用されているが、大通りを横断しなくてはならない公園①（徒歩10分）、公園②（徒歩5分）は利用されていない。また公園等へ行かない場合は、学童保育所前の駐車場が使われており、隣の店の定休日には、店前の空間まで広がって遊んでいる。Fでは、公園①（徒歩2分）が主に利用され、週1回は公園④（徒歩15分）で主にサッカーをしているが、団地内にある公園②（徒歩3分）やマンション内にある公園③（徒歩10分）は利用されていない。公園②は、居住者の利用を優先したことと、治安が悪いため利用を避けて欲しいという保護者の意見があるためであり、公園③は、幼児の利用が多いといった理由から利用していない。隣家との間にある通路では、子ども達が広がらないように交通コーンが設置されており、遊ぶこと

表3 利用されている地域空間・地域資源と学童保育所との位置関係

		徒歩での移動時間	～2分	3～5分	6～10分	11分～
地域空間	遊び専用空間	小学校(校庭・体育館等)		⑤ A・C・F	⑥⑦⑧ C・D・D・H・E	C・E・F・F・F・F F・G・G・G・H
		公園・広場	②③④⑤⑥⑦⑧ ④D	①②③④⑤ C・F	③ A・C・D・E・F	①②③④
	OS	寺・神社	① B	①③	H	
		河川敷	③	B	③ H	
	庭先空間	道	①②③④⑤ H			
		駐車場	②③④ H			
地域資源	商店(商店街・スーパー・ホームセンター等)		①②③④⑤ A	①②③④⑤ A	①②③④⑤⑥⑦ H B・D	①
	駄菓子屋			③④⑤⑥⑦	①②③④	
	銭湯			⑤	③ A・C・D	③④⑤⑥⑦ ③③③
	集会所・ホール※1		③	E・H	C・E・F	F③③③③

凡例：①：日常的に利用されている ②：特別な条件や目的のために時々利用されている
A：利用されていない

低学年の子どもが歩いた場合にかかる時間で地域空間・地域資源までの距離を捉えた。
重複する場所は1例としてカウントした。
※1 集会所で開設しているHを除く。

ができない。Gでは、公園（徒歩5分）が利用されており、ドッチボールや一輪車等の遊びがみられるが、公園が広いと、子ども達は指導員の目の届く範囲で遊んでいる。学童保育所前の道は車道であるため原則遊ばないことになっているが、指導員が付き添う場合は道路にボールを出して水遊びをしたり、けん玉をしたり、駐車場の脇に並んでアイスを食べたりしている。Hでは、広場①（徒歩1分）や学童保育所前の広場②（徒歩1分）が利用され、団地敷地内の歩道は一輪車遊びに利用されているが、団地敷地外にある公園（徒歩9分）は利用されていない。また、広場①（徒歩1分）ができる以前は河川敷（徒歩6分）を遊び場として利用していたが、より近い位置に遊び場ができたため河川敷は利用しなくなり、団地の敷地外へ行くことも少ない。

このように、遊びの内容にあわせてより遠い公園・広場が利用される場合もあるが、日常的に利用されている公園・広場は徒歩5分以内の位置にある。また、外遊びには公園・広場といった遊び専用空間だけでなく、寺・神社といったOSや学童保育所前の道・駐車場といった庭先空間が利用されている。OSや庭先空間は、あれば必ず利用されるわけではないが、利用されているのは徒歩10分以内の位置にあることが表3からも読み取れる。

2) 買い物

土曜日や長期休暇中には、子ども達は一日の大半を学童保育所で過ごすことになるため、昼食づくりやおやつづくりに取り組むことがある。指導員があらかじめ材料を用意する場合もあるが、子ども達が自ら商店へ買いに行く場合もある。

図2をみると、A・C・E・F・G・Hでは買い物に行くことがあり、いずれも徒歩10分程度の範囲にある商店を利用している。徒歩3分以内に商店街・スーパーがあるCでは、子どもが頻繁に買い物に出かけている。夏休みの昼食づくりでは、指導員はお金を渡すのみで、高学年が中心となって子ども達で献立を考え、必要な材料をリストアップしてスーパーへ買いに出かけている。また、平日に指導員がおやつを調理している最中に材料が足りないことに気づき、子どもにお遣いを頼むこともある。「1人で買い物に行ったことがなかったT君(3年生男子)が、初めてお遣いを頼まれて30分程思い迷った末、お金を握りしめて商店街にあるスーパーへ走って行った（無事に買

い物することができた)。(C指導員の発話)」とのエピソードに代表されるように、買い物では、自宅ではあまり経験できないことを体験することができ、商店街は生活体験の場として利用されている。

また、A・C・E・F・Gでは、遊びの一環として子ども達が駄菓子屋等の商店におやつを買いに行く「買いおやつ」が取り組まれている(図2)。Aでは、週に1回、駄菓子屋(徒歩7分)へおやつを買いに行く。「いくらですか。」「30円ですよ。」と、子ども達は店主とやり取りしながら自分で計算して80円以内で購入できるお菓子を選び、高学年の子どもが代表して人数分のお金を支払う。Cでは、「100円の日」に1年生もお金を持って駄菓子屋(徒歩4分)へ買いに行く。「道中でおやつを落とす、お金を無くす等のトラブルも時々あるが、自分の好きなものが買えるから子ども達はとても楽しみにしている。(C指導員の発話)」取り組みであり、慣れないうちは指導員が付き添うが、慣れてきたら子どもだけで買いに行く。Eでは、毎週土曜日におやつを買いに行く。駄菓子屋①②(いずれも徒歩5分)、駄菓子屋③(徒歩10分)、スーパー①②(徒歩5分、徒歩10分)、商店街②(徒歩10分)等、商店が複数あるため、欲しいものをより安く買うために店を選んで買いに行くことができています。「スーパーでジュースを買ってくるから、他のお菓子を買ってきて。(E指導員の発話)」と、子ども同士が協力し合い分担しておやつを買いに行くこともある。Gでは、「最近は安くて近いスーパーで済ませがち。(G指導員の発話)」ではあるが、徒歩8分の位置にある駄菓子屋へ買いに出かけることがある。このように、徒歩10分以内にある駄菓子屋やスーパーは「買いおやつ」の取り組みに活用されている。一方、行事のご褒美としてたまに駄菓子屋へ買いに行くことがあったDでは、駄菓子屋が閉店してからはおやつを買いに行くことがなくなり、10分以内に駄菓子屋がないB・Hでは「買いおやつ」の取り組みはみられない。

3) お出かけ

一日保育となる土曜日や長期休暇中は、平日には時間がかかって取り組めない活動に取り組むことがある。図2をみると、E・C・Gでは銭湯が利用されている。Cでは高学年が合宿する時に自転車で銭湯②(徒歩20分)に行く。最寄りの銭湯①(徒歩10分)は普段家庭で利用することがあるため使われず、特殊な設備がある銭湯②を利用している。学童保育所の周辺に銭湯が4ヵ所程度あるE・Gでは、どの銭湯へ行くかを選択して出かけている。Gでは全員で話し合って行き先を決め、Eでは各班でどの銭湯へ行くかを話し合い計画を立てて銭湯へ出かけている。「知らない人とお風呂に入ったり、お風呂屋さんでのマナー等を子どもは知らないだろうから体験させてやりたい。(E指導員の発話)」「風呂あがりにジュース飲むというような独特の文化を子ども達に味わわせたい。(E指導員の発話)」といった発話からは、銭湯が生活体験の場として活用されていることが伺える。一方、A・Dでは徒歩10分以内に銭湯があるが利用されておらず、B・H・Fでは銭湯がないため利用できない。

また、A・G・Hでは、読書したり本を借りることがある。Aではすぐ近くにある寺(徒歩1分)で週に1回、読書したり本を借りている。Gでは、年に数回、図書館(徒歩15分程度)へ行く。Hでは月1回、移動図書館が学童保育所前に来るため本を借りることができる。このように、地域資源を活用することで、学童保育での遊びを充実させることにつながっている。

以上のように、徒歩10分以内の位置にある商店や銭湯は積極的に利用され、子ども達の生活体験の場となっていることが明らかになった。

3-2. 特別活動

休日には、親子で参加できる行事や地域に向けたイベントに取り組むことがある。このような特段の活動には、多数の大人と子どもが集える広いスペースが必要になるため、地域空間・地域資源を利用することが多い。

図2をみると、B・D・E・F・Gでは、地域空間・地域資源を活用して特別活動に取り組んでいる。小学校1の校庭(徒歩10分)を利用して運動会を行う(D)のように、学校施設を利用してきている事例がある。公園①(徒歩2分)を利用して運動会や地域向けのもちつき大会を開催する(F)、駐車場を利用してもちつきをする(E)、親子で参加するキャンプの集合場所として公園①(徒歩2分)を利用する(F)、公園(徒歩5分)を利用してバザーを開催する(G)のように、日常の遊び以外でも公園や駐車場が利用されている。また、団地内にある集会所(徒歩2分)を利用してクリスマス会や卒所式を行う(D)、隣区のホール(徒歩30分)を利用してクリスマス会・卒所式を行う(F)、マンション内にある集会所(徒歩25分)や教会のホール(徒歩20分)を利用してクリスマス会や卒所式を開催する(G)のように、親子が集える広さを備えた集会所やホールが使われている。

また、学童保育として地域の行事に参加する場合もある。商店街②(徒歩10分)の祭りに参加し、隣の学童保育所と合同でバザーを行う(A)、広場(徒歩1分)で開催される自治会主催の祭りに参加する(H)、神社(徒歩3分)で開催される夏祭りに参加する(G)のように、地域の行事に参加することで公園・広場や神社といった地域空間へ子どもの行動が広がっている。

このように、学童保育での活動に地域資源を活用したり、地域のイベントに参加することで、子どもの遊び行動が地域へ空間的に広がり、地域から認知される機会にもなっていることがうかがえる。

4. 時間・空間・相手の自主選択・裁量性

本章では、学童保育中に子ども達がどこでどのように遊んでいるかを捉える。図3は、学童保育所別に子どもの滞り場所(上部:棒グラフ)と指導員の滞り場所(下部:バーチャート)を10分毎に表したものである。観察日の天気は、G(雨)を除く全ての事例が晴れ・曇りであり、気温はA・B・D・Eでは約20度、C・F・Gでは約15度である。Gでは天気が影響して外遊びがみられなかったため、本章では分析対象から除いて考察を進める。

4-1. 子どもの滞り場所

子どもの滞り場所(上部:棒グラフ)をみると、全ての事例で学童保育所内だけでなく戸外の様々な空間を利用して過ごしていることがわかるが、子どもの滞り場所の分布や滞在人数の割合の変化は事例により異なっている。

A・Cでは、ほぼ全員が同一時間帯に同一空間に滞在し、滞在人数の割合はほとんど変化がないのに対し、B・D・E・Fでは同一時間帯に子ども達が複数の空間に分散しており、かつ、時間帯により滞在人数の割合が変動している。とりわけD・Eでは、子ども達が分散して過ごす傾向が強い。こうした差異が生まれているのは、学童保育

図3 滞在場所の時間的変化(10分毎)

の規模がひとつの要因として考えられる。児童数が10人程度のA・Cでは、指導員を含めたほぼ全員が同一空間で過ごしているのに対し、15人以上のB・D・E・Fでは、指導員も複数の空間に分散している。つまり、子ども達をいくつかの小集団に分けて保育していることを意味している。

次に、子どもの滞り場所と指導員の滞り場所の対応関係(上部: 棒グラフと下部: バーチャートに対応させる)をみると、指導員の滞り場所は子どもの滞り場所と概ね一致しているが、全ての事例で指導員がいない空間で子どもだけで過ごしている時間帯(上部: 棒グラフ上に○で示した部分)がある。

学童保育所前の道でぶらぶらする(A: 4年生男子1名)、学童保育所前で縄跳びをする(B: 2年生女子2名)・一輪車に乗る(B: 1年生女子3名)・草の観察をする(B: 2年生男子1名)、帰宅するために外へ出る(C: 1年生女子、他6名)のように、頻繁ではないが、子どもだけで過ごしている。一方、D・Eでは、学童保育所内で掃除の分担について話し合う(D: 1年女子1名、他8名)のように、班活動として子どもだけで過ごす場合もあるが、公園のジャングルジムの上でおしゃべりする(D: 4年生女子3名)、駐車場でドッチボールをする(E: 2年生男子1名/3年生男子2名/4年生女子1名)、学童保育所内でメンコで遊ぶ・室内に入った蜂を外へ追い出す(E: 5年生男子1名、他5名)のように、子どもだけで過ごしている時間帯が頻繁にあり、子どもが自分の意志で場所や相手を選んで過ごしている。さらにDでは、ヤモリの家をつくるため、指導員に行き先と戻る時間を伝えて子どもだけで団地の裏手へ草を探しに行く(D: 5年生女子2名/4年生男子1名)のように、学童保育の集団から離れて過ごす場面も観察され、遊ぶ時間や場所が子どもの意志に委ねられている。こうした遊び方ができている場所は、学童保育所内(D・E)、学童保育所前の道(A・B・C)、駐車場(E)、公園(D)であり、いずれも学童保育所から徒歩2分以内の位置にある身近な空間である。指導員や高学年の目が届き、何か

あればすぐに駆けつけられる程度の距離にある。

4-2. 遊び場への移動の仕方

図2をみると、遊び場への移動の仕方は事例により異なっている。Dでは、遊び場への行き来の仕方を指導した後は子どもだけで遊び場と学童保育所とを自由に行き来することができるが、それ以外の学童保育所では、指導員が付き添っており、特にA・F・Gでは、子ども達が列になって移動している。

Aでは、低学年の割合が高いことと、公園①(徒歩5分)までの経路に曲がり角がいくつもあり、死角が生じやすいことから移動時には必ず指導員が付き添い、全員で移動する場合は2列になって移動している。Fでは、前面道路には歩道があるもののガードレールが妨げとなり歩道を通行できない。そのため、大勢の子ども達が一斉に公園へ移動する場合は、指導員が子ども達を誘導し、1列になって速やかに車道を横断・通行している。数名程度の少人数で移動する場合は、子どもだけで移動することができるが、1年生は上級生と一緒に移動することになっている。Gでは公園まで歩道のない車道を通り、大通りを横断する必要があることから、全員で移動する場合は、列になって移動している。ただし、高学年がいる場合は、指導員より先に移動する等、子どもだけで移動することもある。一方、Dで子どもが自分の意思で行き来することができるのは、公園が徒歩1分の位置にあり、指導員の目が届く範囲にあるためと考えられる。また、指導員が学童保育所と公園にいて、子どもが行き来する様子を把握できている。

このように、子どもの自己裁量で遊ぶ場所や時間を選択できるのは、遊び場が学童保育所のすぐそばで、指導員の目が届く範囲にあり、遊び場に至るまでに交通事故の心配がある危険な場所がないことが条件となっている。

次に、駄菓子屋で気に入ったおやつを選んで買う取り組みである「買いおやつ」が観察されたC・Fを対象に、駄菓子屋への移動の仕方に着目して分析する。図3をみると、Cでは、子ども達と指導員

表4 保育時間中の子どもの出入りに関する対応

	登録児童数(名)			保育体制	※	①塾・習いごとへ行く場合		②学童保育以外の友だちと遊ぶ場合	
	低	中	高			可否	対応方針	可否	対応方針
A	12			2	6	○	低学年児童が退出する場合、親に所在確認のメールを送る。	×	学童保育を休むか、友だちに公園や学童保育所に来てもらい、学童保育所の外で遊ぶ。
B	44			4	11	○	-	×	学童保育を休むか、公園で遊ぶ約束をする。施設の狭さと怪我等に対する責任がとれないため、未登録児童は学童保育所内に入れない。
C	11			2	5.5	○	-	△	学童保育を休むか、友だちを学童保育所に招く、若しくは公園で遊ぶ約束をする。基本的に学童保育の集団を離れて友だちと遊びに行くことはできないが、高学年については制限していない。
D	27			3	9	○	家庭の責任で可能。	○	家庭の責任で可能。出かける場合、指導員に行き先と戻る時間を伝える。親が不在の家には行っていない。友だちを学童保育所に招くことは歓迎。
E	21			2	10.5	○	遅い時間帯に子どもだけで戻る場合、学童保育所へ電話する。	△	学童保育を休むか、友だちを学童保育所に招く。特に低学年児童については、友だちに学童保育所へ来てもらう。4年生以上については、親の確認の元で、友だちと遊びに行くことができる。
F	70			4	17.5	○	(大変だが)各家庭と相談して個別に対応する。	×	学童保育を休むか、公園で遊ぶ約束をするか、友だちを学童保育所に招く。
G	20			2	10	○	できる限り、保育時間外に行ってもらように相談する。	△	基本的には、公園で遊ぶ約束をするか、友だちを学童保育所に招く。友だちの家に行く場合、親の許可を得る、友だちの家庭状況を知らせる、約束の時間に帰るなどの条件を満たす必要がある。
H	40			4	10	×	指導員が個々人の全てに対応できない。学童保育所から出た後は保護者の責任とする。	×	一度学童保育所を出たら戻れない決まりになっている。友だちに広場へ来てもらうことを基本とする。子どもの成長に応じて親と相談しながら対応を考える場合もある。

登録児童数：上段は登録児童の総数、下段は学年別の人数を表示（低：1～2年生 中：3～4年生 高：5～6年生）

保育体制：通常の保育時間における指導員数（人）

※ 指導員ひとりあたりの児童数（名/人）

○：一時退出した後も学童保育所に戻ることができる

△：条件を満たせば、一時退出した後も学童保育所に戻ることができる

×：学童保育所から退出したら戻ることができない

が一齐に駄菓子屋へ出かけている（16:20：買いおやつ）。指導員からお金を受け取ると走って駄菓子屋へ向かい、おやつを買い終えた子どもから学童保育所へ戻り、おやつを選ぶのに時間がかかった子どもたちは指導員と一緒に学童保育所に戻る（C：16:30 1年生女子2名、指導員1人）様子が観察された。ヒアリングでは、「高学年がいたらお金を渡して昼食の買い出しやお遣いに行かせている。『100円おやつ』の日は、1年生もお金を持って商店街へ買いに行く。初めのうちは指導員が付いていくが、そのうち子どもだけで行かせている。（C指導員の発話）」のように、子どもだけで買いに行くことが頻繁にある。一方、Fでは、約50分間に子ども達が小集団に分かれて学童保育所と駄菓子屋を行き来している（F：15:40-16:30）。子ども集団の規模・構成は様々で、1人で買いに行く子どもも異学年・男女混合で買いに行く子どももあり、おやつを買いに出かけるかどうかを含め、学童保育所から出かける時間やおやつを一緒に買いに行く相手に関して、子どもの裁量に委されていた。

以上のように、学童保育所を拠点にして一定の広がりがある地域空間を子どもが自らの意思で遊んだり、移動したりすることが許されている。こうした空間は、駐車場や学童保育所前の道といった庭先空間やごく近い公園・広場等の身近な遊び専用空間や商店であり、指導員の眼が届く範囲にあることが条件となっている。ただし、1年生が、習いごとへ出かける3年生に付いて行き所在不明になる（C）という例も観察されたように、自由な出入りを許すことによる一定のリスクが常にある。

5. 帰る場としての学童保育所

一般に、学童保育所は子どもが自宅の代わりに「ただいま」と帰る場所である。自宅であれば、帰宅後に習いごとや友だちと遊びに出かけた後も再び自宅へ戻ることは極めて自然なことである。

表4は、保育時間中の子どもの出入りに関する学童保育所の対応を、①塾・習いごとへ行く場合と②学童保育以外の友だちと遊びに行く場合に分けて示したものである。各学童保育所の対応は、場合により大きく異なっている。

①塾・習いごとへ行く場合は、Hを除く全事例で一時退出した後も学童保育所へ戻ることができる。いずれの学童保育所でも指導員による送迎は行っていないが、子どもが外出する時に必ず親へ連絡

表5 保育時間中の子どもの出入りに関する指導員の発話

[1] 今は要望がなく、学童保育所に来てから、その子だけで、どこかへ遊びに行くことはできないが、以前は、6年生で、学童保育所に荷物を置いて「遊びに行ってくるわー」っていう子がいた。高学年（5・6年生）に関しては危ないと思わないし、家に帰ってから遊びに行くことは、なんぼでもあるわけやから、そこは制限はしてない。（C指導員）
[2] 低学年の子だと後先考えへんから、「どこそこに行く」って言ったとしても、その後どこに行くか、わからない。違った場所に行ってしまったら、（友だちの）家に勝手に上がり込んで、上がり込んだ家には誰もおらんとか。もちろん道中危ないし。そういう判断ができないから、低学年には「あかん」と言っている。高学年の子らは、家に誰もいてへんときは、家に上がらないということを、多分わかってるから、そういう時は「外で遊ぼう」って、友だちに言ってると思う。友だちと遊ぶといっても、結局、友だちを連れて公園に来ることが、実際には多いね。（E指導員）

する（A）、遅い時間帯に戻る場合は子どもに学童保育所へ連絡させる（E）のように、子どもの所在を確認できるように対応している。一方、Hでは、学童保育所から一度退出すると戻ることができない。子どもの所在の把握が困難なことに加え、遅い時間帯に学童保育所へ戻る場合やバスを利用して習いごとへ通う場合等、個々の多様なケース全てに対して指導員が対応できないためである。そのため、「学童保育所から退出した後は家庭（保護者）の責任とする」といったルールを父母会で決めている。

②学童保育以外の友だちと遊ぶ場合は、学童保育所により対応が異なっている。Dでは、①の場合と同様に、家庭が責任をもつことを前提にして、行き先と戻る時間を指導員に伝えて外出することが許されているが、D以外では基本的に、学童保育の集団から離れて学童保育以外の友だちと遊びに出かけることは認めていない。その代わり、子どもが学童保育を休む（A・B・C・E・F）か、友だちと公園・広場で遊ぶ約束をする（A・B・C・F・G・H）、あるいは友だちを学童保育所へ招待する（C・E・F・G）ことで、学童保育以外の友だちとも遊べるように対応し、子どもの要求を満たしている。ただし、C・Eでは、高学年に関しては危ないと思わない[1]、4年生以上になると状況判断ができるようになる[2]といった理由から外出を制限していない。また、Gでは「親の許可を得る」、「友だちの家の位置や家庭状況について親と指導員に知らせる」、「約束した時間には学童保育所へ戻る」といった約束事項を確認し、それらを子どもが守ることで学童保育以外の友だちの家へ遊びに出かけることを認めている。

このように、学童保育所において子どもの出入りが許されていることは一般的ではないなかで、本調査対象である民家等を利用した学童保育所では、子どもの出入りが許されている事例が多くみられ

る。しかし、その許され方は事例により差がみられるため、こうした対応の違いの要因を明らかにするために、子ども集団の規模と学年構成、指導員 1 人当たりの子どもの人数との関連について検討する。

学童保育以外の友だちと遊ぶために一時退出ができる D は、利用児童数が 30 名規模、低学年（1～2 年生）が 10 名（37%）、指導員 1 人当たりの子どもの人数は 9 名である。一方、一時退出が許されていない B・F・H は、いずれも利用児童数が 40 名以上であり、低学年が 20 名以上（50% 以上）、指導員 1 人当たりの子どもの人数は 10～17.5 名である。A は利用児童数が 10 名規模、指導員 1 人当たりの子どもの人数は 6 名と少ないが、低学年が 67%（8 名）を占めており、一時退出を認めていない。条件を満たす場合に外出が認められている C・E・G は、いずれも 20 名規模であり、指導員 1 人当たりの子どもの人数は 5.5～10.5 名、低学年が 6～10 名（47%～54%）である。

以上から、子どもの出入りに対して柔軟に対応するためには、指導員が子どもの所在を容易に把握でき、各々の子どもに目が行き届く規模であること、本調査結果からは、全体に占める低学年の割合が半数程度までであり、利用児童数が 30 名程度まで、指導員 1 人当たりの人数は 10 名程度までであることが必要と言える。ただし、これは必要条件であっても十分条件ではなく、利用児童数が 10 名程度と小規模であっても低学年が全体の約半数程度を占めており、出入りが制限されている事例もあった。また、本調査で対象とした学童保育所は全て父母会運営であり、外出時の責任の所在が父母会・家庭にあることが前提にあると考えられる。

6. 民家等を利用した学童保育所と地域との関わり

本章では、地域との交流に関する指導員の発話の内容を分析し、地域との関わりの実態を整理し、それらを支える条件について考察する（表 6）。

1) 地域の子どもと交流がある

クラスの友だちが学童保育所に来る [1]、公園で学校の友だちと遊ぶ [2] のように、学童保育以外の友だちとの交流が行われている。さらに、学童保育所前の道で保育園児と遊ぶ [1]、公園で出会った年上の子どもと遊ぶ [3]、卒所生が遊びに来る [4] のように、異年齢の子どもとの交流も生まれている。学童保育の子ども達が広場で遊ぶことで地域の子ども達が集まってくる [15] のように、学童保育の異年齢集団が地域における遊び集団の核となり、遊びの進展や活性化につながっている。

2) 地域の大人と交流がある

挨拶をする・話をする [5] に留まらず、バイク屋さんに一輪車のタイヤに空気を入れてもらう [10] のように地域の大人を頼ったり、おやつ・写真をもらう [6]、不要になったもちつきセットをもらう [7] のように、物品を提供されるといった親密な交流が生まれている。地域の人からもらった空き缶・古新聞を集めた資金で卒所旅行をする [7] のように、地域から物品を提供されることで、学童保育における活動の拡充につながっている。また、地域の大人から子どもに関する情報をもらう [11]、駄菓子屋のおばちゃんに怒られる・クリーニング屋のおばちゃんに見守られる [12]、指導員が地域の子ども達を見守る・注意する [13] のように、地域に大人の見守りの目が形

表 6 地域との関わりに関する指導員の発話

【地域の子どもとの交流が生まれる】	
[1]	近所に住む、クラスで仲のいい子が「遊ぼう」って誘いに来たり、お隣に住む保育所の子と前(1)で一緒に遊んだりします。その子も「学童の先生」って声をかけてくるんですよ。(A)
[2]	友だちに公園(2)へ来てもらって一緒に遊んでいます。公園が青空児童館の役割。(B)
[3]	公園(3)に行ったら同じ小学校の6年生とも遊んでいますね、「お姉ちゃん」って呼んで。(A)
[4]	卒所してから遊びにこれるっていうか、実は、彼女(指導員)はこのOGで、10年前に6年生だった子なんです。中学・高校の時もずっとキャンプに来てましたし、よく遊びにもきてました。(G)
【地域の大人との交流が生まれる】	
[5]	スーパー(4)の自転車整理のおじさんに「今日はどこいくんや〜?」って訊かれたら、子どもたちに答えさせています。地域の人と挨拶や話ができる子になってほしいので。米屋(5)のおじさんにもよく話しかけられる。(A)
[6]	広場(6)で近所のおっちゃんが散歩に連れてきてる犬を子どもらがすごくかわいがって。おっちゃんも気軽におやつを持ってきてくれたり。撮った写真を持ってきてくれる人もいます。(H)
[7]	6年生になると自分たちで卒所旅行を計画するんですけど、その資金作りにアルミ缶や古新聞を売って。そういうのを、地域の方々が持ってきてくれたり「うちまでとりにおいで」って(声をかけてくれる)。一番近いお風呂屋さん(8)にも新聞を集めてもらって、月1回くらいもらいに行くんです。あと、「学童でバザーしませんか?」って物をいただいたり。去年は不要になったもちつきセットをいただきました。そういう形で結構声をかけてもらってます。(G)
[8]	子どもが買い物に行く中で顔なじみになっていったり。外で遊ぶとみんなに迷惑をかけることもあるけど、逆に、みてもらってるといふか。うるさいという目でみられることもあるけど、来てるのはまた学童保育の子らやなって。(E)
[9]	わりと玄関を開けて広げにしていると、学童保育所の前(9)でうるさくしてることもあるので、子どもがたくさんいるというのは知られてますね。(G)
[10]	まあ、割とバイクにかけてくれる人が何人かいては。何かあったら言うてくれるし、頼みに行ったりもできる。バイク屋さん(10)に一輪車に空気入れてもらいにいったいってとか。(C)
【地域が活性化する】	
[11]	地域の人たちも随分目配りしてくれて、いろんな情報をあちこちからもらう。「あの子、ひとりやっただけで学童休んでんの?」とか「〇〇におつたで」とか。(E)
[12]	駄菓子屋(11)のおばちゃんも怒ってくれるんです、「あんたら、そんなことしとったら先生に言うで」って。クリーニング屋(12)のおばちゃんも学童の子をよう見てくれます。(F)
[13]	指導員が地域の子らの安全にも気を付けてあげてるかな。団地駐輪場の上に乗って遊んでる子や、未成年のやんちゃな子らが溜まってタバコ吸ったりして。そんなのも全部、注意するの指導員の役割になっているなあ。(H)
[14]	毎週月曜日に公園(13)の掃除をしますよ、いつも使わせてもらってるので。週明けは、もう、ゴミがいっぱい。(D)
[15]	ここ(14)、学童保育の子らが遊んでへんときは、ほんと、がらんとしてるんよ。学童の子らが20人30人で定期的に遊びに来るようになると、地域の子らも集まってきたり、「〇〇してー」って言うてきたり遊びに入ってきたりして活性化するというか。遊びに入ってなくても活気があるから、なんか子ども達も地域の子らも楽しんでたり。(E)
【地域を認知する】	
[16]	誕生日の日に花を贈るんですけど、花屋(15)の場所はこの子たちが知ってる。上の子が下の子を(花屋へ)連れて行ってくれるんです。(A)
[17]	寄り道は、やっぱり、してまね。お店に寄るとかよりは道々しゃべったり、自分が通ってた保育所にちょっと寄ったり、犬見ととか触ってとかで立ち止まっていることもありますね。あと、商店街(16)の方から帰ってくる子たちは、やっぱり、こう、店をいろいろ覗いたりすることはあるようです。本当はいいことではあると思いますけどね、帰りの経験というか。でも、今は保護者の方なんかは、結構気にされるので。(G)
[18]	地域の人と私がよく話をするのを子どもが見て。顔を見て「隣のおばちゃんやな、この人、大丈夫な人」って認識するみたい。(略)だから地域の人にもこの人(指導員)とおったらこの子らは学童保育の子やねんなって認識を持ってもらえるようにします。子ども達も、この辺の人なら何かあったら助けてくれるやろっていうのはあるやろな(思う)。(A)※(1)は図2中の①と対応

成されている。こうした地域の大人との交流を可能にするためには、買い物へ行くなかで地域の大人と顔なじみになる [8] のように、子どもが地域で過ごすなかで学童保育所に対する地域の大人の認知・理解を高めることが不可欠と思われる。利用している公園を清掃する [14] のように、地域環境の維持向上に貢献したり、地域空間で遊んだり地域資源を利用することで、地域の大人との交流が生まれており、それを通して地域の大人が学童保育所や子ども達を認知・理解し、地域の大人に見守られる関係づくりにつながっている [18]。

3) 子どもが地域を知ることができる

上級生が下級生を連れて花屋へ行く [16]、学校からの帰り道に犬がいる場所で立ち止まる・商店街を通して店を覗く [17] のように、店を利用したり寄り道をするすることで、子どもが地域に存在する場所を認知する機会となっている。

以上のように、子どもの遊び行動が空間的に地域に広がっていることで、地域の大人や子どもとの交流が生まれている。このような交流は、出入りが禁止され、囲い込まれた学童保育所では得られにくい。出入りが可能な学童保育所では、地域の人との交流があり、地域に出かけることで自分が暮らす地域を知る機会となっている。

7. まとめ

以上のように、本研究では「子ども達が地域のものや人との関わり

その理念に沿いやすいと考えられる民家等を利用した学童保育所を対象に地域との関わりの実態を分析した。その結果、「拠点性」を有する学童保育所の具体的な成立条件として、以下の3つの事象を導いた。その概念図を図4に示す。

①学童保育所を拠点にして子ども達の遊び行動が地域へ空間的に広がっている：本調査対象では、子ども達は学童保育所内だけでなく戸外の様々な空間で過ごしており、日常的な遊び場として公園・広場に加えて、寺・神社、河川敷、道・駐車場が利用されていた。また、徒歩10分以内の位置にある商店や銭湯は積極的に利用され、生活体験の場として活用されていた。

②遊ぶ時間・場所・相手に関して、子どもに一定の裁量を与えられている：本調査対象では、一斉行動を余儀なくされる事例がある一方で、子どもが自分の意思で遊ぶ時間や場所、相手を選択して過ごすことができていた事例が存在した。

③塾・習いごとに行ったり、友だちと遊ぶために学童保育所から外出した後も帰ってくる事ができる：本調査対象では、塾・習いごとに行く場合は、多くの事例で学童保育所へ戻ってくる事が許されており、友だちと遊ぶ場合は、いくつかの条件をクリアすれば外出が許されていた。

また、これらの3事象を実現するために物理的・空間的に求められる要件は以下の通りである。

①学童保育所の周辺に公園・広場といった遊び空間や商店・銭湯といった地域資源が存在していること

②利用可能な戸外の空間が学童保育所のすぐそばにあり指導員等の目が届く範囲にあること：本調査からは、日常的に利用する公園・広場は概ね徒歩5分以内、オープンスペースや商店は徒歩10分以内にあることが望ましいことを指摘できた。

③指導員が子どもの所在を把握することが容易な学童保育の規模であること：本調査からは、概ね30名程度まで、指導員1人当たりの子どもの人数は10名程度までが望ましいことを指摘できた。

そして、こうした「拠点性」を有する学童保育所の利点として、①地域資源を活用して豊かな生活体験を得られること、②学童保育所で過ごししながら地域の大人や子どもとの交流が成立すること、③学童保育の子ども達が地域空間・地域資源を利用することにより、地域の子どもたちに遊びが波及する、子どもの声がきこえる環境が形成される等、地域の活性化に貢献することを見いだすことができた。ただし、子どもが自由に出入りできることで、子どもの所在を把握することが難しくなり指導員の負担が増すと同時に、事故や怪我にあう、子どもの所在がわからなくなるといったリスクがともなうという課題もある。

今回、調査対象とした民家等を利用した学童保育所において「拠点性」が成立していた背景には、専用の戸外遊び場を有していない、室内空間も狭いといった空間的制約があるなかで必然的に地域の空間や施設を利用しているという面を持つと同時に、民家等が概ね小規模であり、学童保育所前の道等の庭先空間が目届く範囲にあることによって施設内と戸外空間の物理的・心理的障壁が小さくなっていることが関係していると考えられる。こうした戸外空間とのつながりに関する空間的な工夫は、民家以外の学童保育専用施設であっても検討されるべきである。本研究で対象とした民家等を利用した学童保育所は、冒頭でも指摘したように、施設の狭さ、老朽化な

図4 拠点性を備えた学童保育所の概念図

ど多くの問題を抱えており、これらを早急に解決すべきであることは明らかである。しかし、地域のものや人との豊かな関係を築きやすく、「拠点性」を持つという意味では、他の形態を含めた今後の学童保育施設のあり方として引き継ぐべき利点を多く持っていることを指摘できた。本研究で明らかにした「拠点性」の成立条件を、小学校や児童館等を利用した他の形態の学童保育所でいかに実現できるかを検討することが今後の課題である。

謝辞

調査に協力していただいた学童保育所の関係各位に心より御礼申し上げます。なお、本稿は大阪市立大学生活科学部居住環境学科卒業生・畠直樹氏と共同で取り組んだ研究成果である。

注

- 注1) 広辞苑第5版(岩波書店, 2005)を参照し、本研究では、共働きなどにより昼間親が家にいない家庭の学童を、放課後や休暇中に保育することを「学童保育」、あるいは単に「保育」とし、学童保育を実施する場所を「学童保育所」と記す。また、現行制度上の正式名称は「放課後児童健全育成事業」であるが、本稿では、通称である「学童保育」を用いる。
- 注2) 放課後児童クラブガイドライン(2007年10月策定)を指す。
- 注3) 2007年度学童保育の実施状況について、大阪市子ども青少年局から得られたデータを掲載した。

参考文献

- 1) 斎尾直子, 長谷夏哉: 都市における児童の居場所づくりの多様化と安全安心-こども達の放課後の居場所づくりに関する研究-, 日本建築学会計画系論文集, No. 614, pp. 33-39, 1997. 4
- 2) 三矢勝司, 高橋博久: 民家型学童保育施設の空間構成に関する調査研究, 日本建築学会大会学術講演梗概集 E1, pp. 59-60, 1997
- 3) 谷村麻里, 今井正次: 室の分離段階からみた学童保育所の保育室計画に関する研究, 日本建築学会大会学術講演梗概集 E1, pp. 149-150, 2003
- 4) 宮本文人, 岩淵千恵子: 学童保育施設における活動機能と平面構成, 日本建築学会計画系論文集, No. 618, pp. 25-31, 2007. 8
- 5) 松本歩子, 山根さおり, 関川千尋: 近年の学童保育所のあり方に関する研究-全児童を対象とする「守口児童クラブ」と従来型学童保育「バンビーホーム」の事例比較に着目して-, 日本建築学会計画系論文集, No. 630, pp. 1683-1690, 2008. 8
- 6) 永川靖洋, 横山俊祐, 玉井伸幸: 運営方法からみた学童保育の実態と特性, 日本建築学会大会学術講演梗概集 E1, pp. 155-156, 2002
- 7) 玉井伸幸, 横山俊祐, 永川靖洋: 学童保育が子供及び地域にもたらす可能性, 日本建築学会大会学術講演梗概集 E1, pp. 157-158, 2002
- 8) 小池孔子, 横山俊祐, 玉井伸幸, 武田直人: 開設・運営からみた学童保育の実態と特性, 日本建築学会大会学術講演梗概集 E1, pp. 501-502, 2004
- 9) 武田直人, 横山俊祐, 玉井伸幸, 小池孔子: 空間特性からみた「地域型」学童保育の評価, 日本建築学会大会学術講演梗概集 E1, pp. 503-504, 2004
- 10) 塚田由佳里, 小伊藤亜希子: 民設型学童保育所の抱える空間課題-大阪市の事例調査より-, 大阪市立大学大学院生活科学研究誌 vol. 3, pp. 85-98, 2004

(2008年9月11日原稿受理, 2009年8月19日採用決定)